

## ディスカッションの記録

## 特集 ディスカッションの記録

日時 令和二年九月一四日一五～一六時

コメンテーター

山田 浩之（広島大学大学院人間社会科学研究所教授）

山口 輝臣（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

司会 石田 雅春（広島大学七五年史編纂室准教授）

○石田 討論を開始したいと思います。初めにコメンテーターの山田先生と山口先生にコメントを頂きまして、そこで出された質問とフロアから出された質問とを合わせて、ご報告者の方に答えていただくという流れで行います。早速ですが、山田先生からコメントをお願いします。

○山田 ありがとうございます。とても興味深く聴かせていただきました。私も少し研究の紹介を兼ねてお話をさせていただいた上でご質問させていただきます。

私はずっと高等師範学校について関心を持って研究をしてきました。高等師範学校と帝国大学の文学部・理学部を比較して、それぞれの学校からどのような教員が配置されてきたのか、その教員が中学校・高等女学校の中でどんな生活をしてきたのかといったことを研究してきました。

その中の大きな関心として、一つは、戦前、教員というものがどの

ように活動していたのかということ。それは現在も続いていて、特に今は現代の教員について同じような関心を持って分析をしています。もう一つは、戦前の帝大以外の専門学校は不思議な学校ですので、先ほど福嶋先生から福岡大学の話がありました。同じように高等商業学校なども含めて戦前の専門学校あるいは高等師範学校がどういう学校だったのか、特に入学者はどういう出身階層から来て、どういう所に就職をしていたのかということに関心を持って研究してきました。

ですので、植民地の学校とかを直接分析してきたわけではないですが、日本の学校との関連、特に高等師範学校は教員を中国や朝鮮半島あるいは台湾に送っているということ、数多く留学生を受け入れているということ、そのあたりと学校の役割について少しコメントをさせてもらえたらと思います。

まず、今日は日本人がどのように海外の学校に行っていたのかという話でしたが、では留学生はどのようなことですか。これは今日参加している院生の楊駒（ヤン・ジユウ）さんが東京高等師範学校にどのくらいの留学生が入ってきたのかをまとめたものです。一九〇九年～一九二二年、大正期までですが、主に中国からの三七三人の留学生が入ってきています。これは広島高等師範学校も同様で、各年だと数人ですが、トータルでは二〇〇～三〇〇人の留学生を受け入れています。

このようなかたちで数多くの留学生を受け入れてきており、高等師範学校に留学したのだから彼らは教育を学びに来たのだ、そして中国に帰って教育についてリーダーとして活躍したのだというふうに言わ

れてきましたが、しかし高等師範学校のカリキュラムを見ると、実は教育学、心理学というのは非常にわずかで、教師の準備教育とはとても言えないところがあります。

明治の時代、まだ予科と本科に分かれていた時代の予科一年生のカリキュラムを見ると、これは予科なので完全に教養教育で、ほとんど教育学等はありません。本科になっても、心理学、教育学が週に二時間あるだけで、ほかは専門の科目と、英語が非常に重視されているというのが分かります。三年の三学期に心理学、教育学が非常に多くなっているのは教育実習からで、ほかの時期はほとんど心理学、教育学を勉強していないというのが分かります。

それでも日本人に関しては、卒業後、奉職義務というものがありまして、教員として非常に社会化されるというところがあります。これはマイヤー (John Meyer) のチャーター理論に従って完全に教員にならなければいけないというので、教育の授業はほとんどなくて教育について勉強していなくても、みんな教師としての知識は自然と身に付けていくというところがあります。

では留学生はどうだったのでしょうか。先ほどの楊駒さんの研究で、その中心になったのは田漢 (ティエンハン) という人です。ご存じの方もおられると思いますが中国の劇作家で、中国の国家の詩を書いた人です。ですから中国では非常に有名な芸術家になったのですが、この田漢は東京高等師範学校に留学している。

では、ここで英語教員になる勉強をしたのかというと、楊さんの分析によれば、田漢の日記には学校のことが全く記述されていない。近

くのおしゃれなカフェでコーヒーを飲んで、イギリスの演劇について一生懸命に勉強をして、福原麟太郎とか東京高等師範の英語の先生とは交流を持ちますが、授業のことは全然書いていない。教育のことなんて、ほとんど勉強していません。ですから、学校の機能という意味では、要するに留学生はほとんどそういう勉強をしていないということになります。

そういうことを考えると、今日のお話にあった京城帝国大学とかいろいろな朝鮮半島につくられた学校、戦時期につくられた学校はどういう役割を果たしていたのでしょうか。実質的に何か知識を与えたというよりも、それは別の社会的な役割が何かあったのではないかと思います。実際に日本に来ていた留学生たちも、高等師範に来た学生が教育を学んで帰ったというよりは、高等師範に来た、日本に来たということが非常に大きな意味を持っていたのではないかと。まずは、どのような役割を持っていたのかということ、三人の先生方に聞きたいと思います。

あと、高等師範学校について見ていきますと、教員のインブリーディングの問題というのが非常に明確に出てきます。これは高等師範学校が最初につくられた時、(教員は)ほとんど東大の卒業生が占めていたのですが、だんだんと高師の卒業生が増えてきます。文理大でも、上の世代というのは東大・京大の出身者が非常に多いのですが、若い世代では東京高師の卒業生が京大に行って文理大の先生になるということが書かれています。こうしてインブリーディングが進んでいくわけです。

では、どうしてインブリーディングが進んでくるのかというのを見てみると、これは東大に対する対抗策です。放っておくと東大に全部教員を取られてしまう。文理大も全部、東大の下の大学というふうになります。東大に対抗しようとする、要するにインブリーディングをして、文理大出身、高師出身の人を採用していく必要がある。

今日の永島先生のお話を聞いていますと、これは要するに研究所を通じて京城帝大のステータスを高めようということですが、同じようなことが何かあったのではないかと思います。ですから、京城帝大がステータスを高めるためにどのようなことをしていたのか、何かご存じでしたらお教えいただけますか。

また今回のお話では、京城帝大は理工学部が非常にうまくいったということですが、これはどうしてうまくいったのでしょうか。それはカリキュラムとか教員の質によるものなのか、それとも当時の朝鮮半島の社会的要請に應えるものだったのでしょうか。

次に木村先生にお尋ねします。朝鮮半島から内地への進学が非常に起こったということで、これは戦前期あるいは戦後もそうかもしれません。こういう人の動きは日本の特徴でもありません。先生は山口におられたということですが、例えば山口なら山口高商（山口高等商業学校）を通じて人がどんどんと関西・関東へ流れていく、そこから朝鮮半島や満洲に流れるということもあつたようです。日本の場合、地方から東京への流れというのが非常に明確で、朝鮮半島での動きと内地での人の動きはとも似ているように感じたのですが、これはどこが違うのでしょうか。大きな違いがあれば教えていただきたいと思

ます。

最後は福岡先生にお尋ねします。戦時期になって中学校や女学校が増えるということで、その現象についてはお話しされましたが、それはどうしてなのでしょう。なぜ学校が増えるのでしょうか。これは内地でも同じように高等教育機関がいろいろなかたちで増えていきます。ですから、どのようなメカニズムで学校が増えてきたのかということについて教えていただければと思います。

○石田 山田先生、ありがとうございます。それでは続きまして、山口先生、お願いします。

○山口 東大駒場の山口と申します。私は個別の質問をした後、全体という少しおこがましいですが、そうした問いを一つぐらい出してみたいと思っています。

まずは永島さんのご報告になりますが、京城帝国大学理工学部は、それ自体としては学生を十分に輩出するまでに至らなかつた教育機関なわけです。しかし、学生をあまり輩出しなかつた教育機関はどのようにしたら研究対象になるのか、そうした問いが含まれている、そうした方法論をこつそりと示しているご研究でもあつたのかなと思います。例えば教員の兼務というかたちで教員の社会的な有り様を検討してみたりとか、その後も含め学生の輩出を視野に入れることによって広げていくやり方とか、なかなか興味深く伺うことができました。

質問としては、私も現在は東京大学におりますが、それまでは九州大学文学部に長らくおりました。そこは、いわゆる後発帝国大学の一つ、京城と同じような類型に入るところで、文学部の前身である法文

学部という存在をえらく気にしていたところがございます。

ですから、それとの類推からいくと、理工学部というかたちにしたことの効果みたいなものがあつたのか、なかったのか。法文学部などとは少し違う点でいくと、早稲田などはじめ若干先行例が、なくはないという面はあると思います。しかし京城帝大の理工学部はソウル大学校になる時に早速分離してしまう。それこそ帝国大学の法文学部が、日本中で法学部、文学部、経済学部に分かれていったと同じような現象をたどっていくわけです。

そうしたときに、理学部でも工学部ではなく理工学部であつたことの効果みたいなものを、長くはない京城帝国大学の歴史の中で何か見いだせるのですかという質問をしたいと思います。

引き続き、木村先生への質問になります。本日の木村先生のお話は、比較する軸の可能性を広げてくれる、もつとこんなかたちで比較してもいいということを示唆してくれる、そうしたご研究でもあつたと思います。在朝日本人が行く、高等教育を受ける、これが留学なのかどうかはともかく、そうした観点からいくと、例えば朝鮮出身の朝鮮人が日本に留学するという現象と当然比較することは可能でしょうし、一方、在朝日本人二世・三世という点に着眼すれば、内地出身の朝鮮人二世・三世の教育プロセスとの比較、それは内地で就学していく、あるいは外地に行つて就学をする、さまざまなかちががありますが、そうしたものの比較を示唆してくれる、あるいはそのためにはこうしたきちんとした作業が必要であるということを教えてくださいという意味でも、大変興味深いご研究だつたかと思えます。

その中で、特に今回に関しては長崎県出身の人々を軸に『大衆人事録』を使ってデータを取られていた。この時に、なんとなく長崎県出身なので進学先も長崎とか九州とかという雰囲気があるのではないかと勝手に予断していましたが、そうしたものが見えないうちに見えないとした場合、これはどう考えたらいいか。というのは、やはり出身地域に伴う結合というのは、日本社会にはそれなりにあつたとされているように思います。そうした中で、高等教育への進学という側面に関していくと、それが分かりやすくは見えてこない。そのことをいったいどう考えたらいいか、このような質問をしたいと思います。

三つ目の福岡さんの報告ですが、普通にはニッチな領域とされてきたようなものを思い切つて深く掘ってみる、あるいはニッチな領域全体を俯瞰できるようになるところまで持っていく、それによって、そういうものをニッチと見てきた考え方というか、研究の前提みたいなものを揺さぶる、そうしたお仕事であつたのではないかと思います。

個々にいろいろ細かいことで尋ねたいことがあります。ここではあえて大ざっぱに一点だけお尋ねいたします。在外指定学校は、いわば日本国家の教育のシステムと接続するものであるけれども、そこに国家の主導性を強く見ない、明確な方針でもって何かをやつていくというのを見ないということではないかと思いました。その場合、「こうした行政の方面における文部省とはいったい何なのか」という問いをお尋ねしたいと思つています。

というのは、最近、駒場の外村（大）先生のところの院生の朴成河（パク・ソンハ）さんが博士論文を書かれました。それは帝国日本における朝鮮人の「内地留学」について、網羅的かつ本格的な学位論文でしたが、その中でも、教育に関わって朝鮮総督府と文部省の狭間に落ちてしまうような、あるいは両者のどちらかが出張る、または両方が出張っていかなければいけないような場面における文部省の意向というのが資料的にもよく見えてこない。あるいはそこに出張っていくチャンスがあるのに出ていこうという気概が見えない、そうした場面をしばしば見ることができました。

そのようなものの類推からいったときに、こうした領域について文部省は何か方針があったのか、あった場合はどんなものだったのか、あるいはなくて、やはり外務省にお任せしようと考えていたのか。つまり今後これを政治的に検討していくときには、そもそもアクターとしてどんなものを考えていくのか、どのように言ったらいいのかということについてお尋ねしたいと思います。

お三方の報告、それぞれ特徴が微妙に違う方向を向いているので、変にまとめることに意味があるのかどうか分かりません。しかし強いて言うと、現地化の動きがある一方で、現地に留まらない所に行く、内地に留学をする、あるいは日本に留学に来るといった動きがある。そうしたものの諸相を描いたものだったと思います。この二つのベクトルは、ある時期はこちらという話ではなく、たぶん並行していくもので、現地化の一方で内地に行くといった動きが常にあるようなものではないかと思えます。

これはいわば二つの方向性みたいなものを言っているだけなので、合っているとも間違っているとも言いにくいところだと思えますが、この点をめぐって、おそらく今日のお話では、中等教育以下と高等教育ではそれなりに差があるのではないかと、また現地化とか内地留学というときにも、朝鮮人のもの、台湾人のもの、日本人のもの、いろいろと違いが出てくるのではないかと、そうしたことを示唆してくれているような気がします。つまり、そういったマトリックスみたいなものを念頭に置きながら整理していくと、いろいろ見えてくるのではないかと。

その中で、京城帝国大学というのはどう位置づけるのか、あるいは位置づけるとうまくはまったり、これまでと少し違った見方ができるのか、そうしたところも興味深い点だと思いました。最後はほとんど感想ですので、何か思いつくことがあった方だけ答えていただければと思います。

○石田 ありがとうございます。まず共通する質問として、山田先生から、それぞれの学校はどのような社会的役割を担っていたのかというご質問がありました。永島先生から順番にお願いします。

○永島 今の全体的なご質問に関しては、京城帝大なりの役割とか位置づけというものは、あるいは理工学部であることの意味とか効果とか、それがうまくいっていたのかといったことは、簡単に一言二言で言うことはできないと思うのですが、やはり理工学部の場合は歴史が短すぎる上、(戦時措置で修学期間が)学部としても二年半ぐらいですし、予科まで入れてもプラス三年になるかならないかという時間

しかありませんので、何か成果があったかをその段階で見いだすというのは結構難しいかなと思います。

ただ、多少手前味噌にはなりますが、その後の韓国なり北朝鮮の高等教育、あるいは技術者養成ということまで視野に入れてみれば、これを日本人が言うといろいろ悶着が起きてしまうのかもしれないが、科学技術に関しては播磨期であったという側面というのは認めてあげていいのではないかと思われてなりません。

また、学生がいろいろな所から集まってくる、もちろん日本の内地からも来ますし、満洲からも来ますし、満洲の中でも関東州のほうから来たり、台湾からも来たり、あるいは朝鮮出身者が台北帝大（台北帝国大学）に行つて、また戦後、京城大学に編入してソウル大学の先生になるとか、本当に回遊魚のごとく、結果的には帝国の中をぐるぐる回っている人たちがいたことは確実ですので、それをもう少し明示的に、今後とも歴史的に位置づけていかなければいけないというふうには思っております。

○石田 ありがとうございます。山田先生のご質問だけではなくて、山口先生のご質問、あるいはフロアの有田さんから「理工融合の実態と意義はどのようなものだったのでしょうか」というご質問などが来ておりますが、そのご質問に対してもお答えいただきました。それでは木村先生、続きましてお願いします。

○木村 フロアの金子先生からも質問を頂いていますが、だいたい似ているところがありまして、なぜ在朝日本人が内地に留学したのか、内地でも出身地ではない所になぜ行ったのか、逆に言えば出身地との

関係はどうであったのかということになるかと思いますが、そういう質問がありました。

報告では省略したのですが、実業家の子どもだけでも高等教育を受けるかたちになっている理由として、やはり多様な高等教育が内地にある、その中でも専門知識を得ることが実業家の子どもにとつても必要とされるような時代になってきているのではないかと。よく言われるのは、鈴木商店などで生え抜きのたたき上げと高商出が拮抗していたということですが、やはり高商出というのが一定程度重宝されるようになってきた時代が一九二〇年代から一九三〇年代に進んでいったのではないかと思います。

そして、実際に東京商大（東京商科大学）とかを出て家業を継ぐというのも出てくるわけです。それは明治期に個人商店であったものから、かなり大規模な株式会社組織でさまざまな事業をやるようになってきて、そこでは高等教育を受けるかたちになっている。

それからもう一つ私が挙げたいのは、これは非常に大きな問題になってきますが、朝鮮における事業経営の不安定性というのも一つあったのではないかと考えています。ですから、取りあえず高学歴を与えておこうということですね。

それともう一つ、一九二九年ごろに朝鮮で出された進学の手引きみたいな本がありますが、それは立身出世ということと絡んで、内地人と朝鮮人両方に向けたものですが、いろいろな学校があつて、そこを出ると何になれるといったことが書かれてあるもの。そして、その中には内地は表舞台だというような言い方をしているところがある。

植民地にいた当時の日本人にとって、やはり内地は表舞台という意識があったのではないかと。実業家・事業家は別ですが、(朝鮮に赴任した)官吏は加俸という外地手当を求めていくケースも結構あったわけですね。それは得られるのですが、(その根底には)表舞台は内地なのだという認識があったのではないかと。これは植民地にいた日本人の意識構造というものから見ていかなければいけないと思いますが、そういうアプローチの仕方もあり得ると思っております。

それで、山口先生の長崎出身者が郷里のほうへ行かなかったのはなぜかという質問について、全体を見ているわけではないですが、意外と少ないというのは事実としてあります。高等女学校に行くケースは、割と親戚に預けるといふかたちで出身地に行くケースが多いのですが、高等教育を受けることを目指して内地に行く場合は、東京が圧倒的に多いという傾向があると思います。それは、やはり先ほどの表舞台だったら東京だということになるのかなと思っております。

山口先生は示唆的であるというまとめをされたのですが、その具体的な点についてはさらに考えていかなければいけないところで、大変有意義なコメントを頂いたと思っております。ありがとうございます。

○石田 木村先生、個別質問も含めてお答えいただきましてありがとうございます。続きまして、福嶋先生、よろしくお願いします。

○福嶋 山田先生から頂いた質問で、どういう要因で学校が出来上がっていくのかというお話ですが、具体的に分かる例でいうと、例えば北京日本中学校は結果的に五年程度しか存続しなかった学校です

が、強力に創設をプッシュしたのが華北交通株式会社の父兄です。かなりの富裕層が満洲から流れてきて、その人たちが強力にプッシュして瞬く間に中学校までが出来上がっていく様子が確認できます。

現地にはさらに多くの日本人がビジネス・チャンスを求めて入り込んでくることで、急速に人口が蓄積され、まずは小学校、さらにその上の中等教育機関までできていきます。そしてそのことがさらに現地日本人社会の根をますます張らせていく。学校の建設はそのようなサイクルのなかにあつて、現地日本人社会の形成を促していく作用があつただろうと思います。

そのことと関連して、実は木村先生の発表を聞いて非常に興味深いのは、Uさんが自分は三世だということを自称として用いていたということです。おそらく子供が現地で生まれたり、育つたりするようになる、どこか内地の人と距離感を持つ、当時の資料を見ると二世という言葉を自称として使う現象が出てきます。たとえば北京の女学校の資料を見ると、そのアンケートの中に「あなたは中国生まれですか、日本生まれですか」という設問がありました。内地ではない所に生まれた日本人二世という意識を芽生えさせているということ、それは学校ができたことでもますます現地で日本人社会が根をはっていった、先のお話と関係があるように思います。

山口先生からあつた文部省の対応という質問については、フロアからも質問がありました。文部省はかなり自己抑制的というか、外務省に任せきりで、文句は言うかもしれないけれども、外務省から回ってきた書類に自分たちもチェックを入れるという程度で、権限を回収

しようとする動きは見られません。

植民地教育であれば総督府の管轄ですが、そちらに渡っていた日本人、植民地在住の日本人の教育についても文部省は関わろうとしません。あるいは内地に進学してきた朝鮮人についても朝鮮総督府やその外郭団体として朝鮮奨学会というのを東京につくりますが、そちらのほうに丸投げしています。

どうしてそういうことになり、またそれは何を意味するのかという点は今後の課題ということになりますが、この問題はもう少し前の段階にヒントがあるような気がしています。具体的には一九一〇年代前後の、朝鮮や台湾など日本の版図が拡大していき、そこをどうするか、日本国内のコピーにするのかしないのかといった場面というのが一つの分岐点なのかと考えています。その時代の教育雑誌などを見ると、割と文部官僚が植民地の教育についての論述を書いたりする。しかし、一九二〇年代以降になると、ぱたっとなくなるので、その辺に担当領域が確定され、関係が整理される。一九〇〇年代〜一〇年代というのは、ハワイや北米でも移民排斥が行われて、現地の日本人児童が隔離されたという問題があるように、植民地だけでなく移民地でも在外日本人をどう扱うのが問題になる。そしてこの段階ではある程度、文部省の関与が確認でき、その後、領域が調整・確定されていくという見通しを持っています。

次にフロアからの質問で、金子先生からの「教員の質をいかに確保していたのか」ということについて、教員の採用は外務省を介することもありますが、基本的にはやはり自己調達です。ただ、満鉄は強力

なツテがあるので、それなりに優良な教員が招聘されますが、フィリピンなどで小さな小学校などではそうもいかず、旦那さんが校長、奥さんが先生という例、あるいは語学担当として現地の人を雇い入れる例が見られます。植民地では日本の教員免許は全員が全員必要なわけではないので、このように移民自身が自己調達することになります。要するに本国政府が何から何まで面倒見るわけではないというのが基本だろうと思います。

○石田 今、フロアからの質問も含めて、山田先生と山口先生のコメントに対しての再返答をしていたのですが、山田先生から永島先生の質問でまだ未消化の点が一つあります。広島高等師範学校へのインブリーディングの事例を踏まえて、同じようなことが京城帝大でもあったのか、それとは別に京城帝大のステータスを高めるような動きがあったのか、それについてお答えいただきたいと思います。

これに関連してフロアの金子先生から「京城帝大の日本人教員の転任等の流動性はあったのでしょうか。移動性はなく、かなり朝鮮に根を下ろすかたちで教育・研究をしていたのでしょうか」という質問があります。京城帝大の教員の研究あるいは後進の育成に関する質問と関わりがあると思いますので、この点についても永島先生からお答えいただければと思います。

○永島 ステータスを高めるとか、文系・理系という分け方はあまりにも形式的な割り方すぎてしまうのかもしれないませんが、技術者に関して見ると、(学んだことを)直に故国なり独立後の建国に生かしていくという側面は強いのではないかと思います。



ステータスということで、例えば京城帝大に限定して考えると、法学部などは教員たちがかなり仲がよかったようで、安倍能成を中心として岩波書店からもずっと研究書を出し続けていて、当時の文壇といえますか、知識人界にそれなりの影響力を持ち得た。また医学部も志賀潔をはじめとする有名な医学者たちがいました。

ただ理工学部については、本当に時間（歴史）が短いというしかありません。先ほどの山口先生のコメントにも少し関係するのですが、法学部の中でも法科と理工学部は若手ぞろいで、三〇代前半で帝大の助教授・教授になっており、主に東京帝大（東京帝国大学）出身者だと。

それで金子先生の質問にもつながっていくのですが、教員等の流動性の問題について、医学部とか法文学部の場合は、（内地から来た）若手が、ある程度時間がたつて、内地に戻っていくというのが確かにありました。典型的なのは白井成允という倫理学の先生です。もとは京城帝大の倫理学講座にいたのですが、広島文理大に国体学の専攻ができる時に移っていきました。そのようなかたちで、やはり言い方は悪いのですが、外地の帝大よりは内地の帝大以外でも入りたいたい。安倍能成も一高（第一高等学校）の校長として戻りますし、ランクを下げてでも東京に戻りたいとか内地に戻りたいというのはあったと。子どもの教育の問題等々家庭のこともあったと言われており、少し嫌な見方かもしれませんが、それはあったようです。

○石田 ありがとうございます。今、一通りお答えを頂きました、事前に報告者の方にお送りしていたフロアからの質問についても、かな

り踏み込んだご返答を頂きました。

今、質問と回答を整理して一つ抜けているものがありました。福嶋先生への質問です。「スライド一枚目のご説明で、『南米や北米では在外指定学校がなく、日本の国民教育とは切れていた』というお話でした。それは南米や北米での在外指定学校への申請率が低く、中国での申請率が高かったということなのか、そもそも南米や北米には日本人学校が少なく、中国で多かったということなのでしょうか。例えば初等教育でいえば、在外の日本人小学校のうちのどれぐらいが在外指定学校になったのでしょうか」というフロアからの質問があります。これについては、コメントターの山田先生のご質問とも関係があると思いますがいかがでしょうか。

○福嶋 日本政府が公認するのが在外指定学校ですから、そういう意図はなくても、現地国からすると排日の火種になるわけです。だから基本的に日本人学校として指定学校ができるのは、日本の勢力圏もしくは現地の政府があまり干渉してこない地域に限定されます。東南アジアにも割と在外指定学校がありますが、外務省は現地国の反応を気にしていて、指定するのを控えようとする認識の存在が確認できます。

ですから基本的に南米・北米というのは現地からの干渉が強く日本政府による在外指定をする環境にはなかったということになります。ただ一方で、アメリカの場合ですと文明国アメリカの現地校のほうを望むという傾向はあったらと思うと思います。他方、東南アジアなどでは現地校を避ける観点から自ら学校をつくり、その後、本国政府に指定を求める。在外指定学校の分布は現地国からの干渉の度合いだけで

なく、文明度に対する認識も関わっていたと言えます。

全体の指定率については結局、母数が分からないので判明しないというのが実情です。また指定数についても、スライドで挙げたのは渡部宗助先生が作られた表ですが、元になっている官報でも満洲国については途中から掲載されなくなるので、指定数ですら全容がはっきりしないのが実情です。

○石田 ありがとうございます。あとフロアから「朝鮮史、留学政策史の視点から内地留学をどう考えるのか。在朝鮮日本人の内地留学の規模は？ 研究対象の前後の人数は？ 在朝鮮日本人の内地留学は全く自由だったのか。留学生規定などはあったのか。入試においては留学生枠組みか、あるいは日本の教育機関出身と同じ資格か。文部省や学校当局は在朝鮮日本人を留学生と認識していたか。それに関わる規定などはあったのか。日系二世・三世の場合、文部省は米国人留学生と分類、カウントしていることは見られるが、もしそのような規定などがなかったら、朝鮮人・台湾人の内地留学とは大きな違いがある。つまり用語が同じだが在朝鮮人、日本人の内地留学については、もう少し説明が必要ではないか」というご意見を頂いております。

これは私のほうから少し補足させていただきたいのですが、以前、私が分析した広島高等学校と文理科大学の事例で言いますと、在朝鮮とか在台灣の日本人は、ほとんどの親が日本国内に本籍地を残しているため、外地出身の子供たちは書類上、日本国内の出身として処理されています。このため出身の中学校などを追跡調査しない限り、当時の統計からは、その生徒や学生が日本国内の出身なのか、外地出身な

のかというのが見えてきません。今回のご報告は従来の資料で分らなかった人の流れを明らかにしたことに意義があると思います。ですから、もう少し説明が必要というご意見には私も賛成です。

司会のほうで受けてしまった質問もありますが、山田先生、山口先生、今のご報告者からのお答えを踏まえて何か追加のご質問はありますか。

○山田 山田です。特にありません。どうもありがとうございます。

○山口 山口です。私自身は特にないのですが、もし報告者相互で聞きたいことがあればやってもいいのかなと思います。ただ時間が許す範囲でということにさせていただきたいと思います。

○石田 ありがとうございます。先に今の質疑応答を踏まえて、さらにもう少し質問してみたいという方がおられましたら Teams の挙手機能を使ってご質問をいただければと思います。

○木村 フロアからの質問に対する答えですが、石田さんが言われたように、私も山口高商で（生徒の）出身地を調べましたら全部親の本籍地でした。ですから、内地の学校で、この人たちは在朝日本人とか在台灣日本人だと把握するのは難しいということです。私がやりましたように、紳士録などに載っている分をピックアップすることぐらいしかできないということです。

それと、在朝日本人の内地留学は留学と言えるのかという問題があると思いますが、そういう制度的な面ではほとんど日本内地の学生と同じということには間違いない。しかし、何らかの意識とか卒業後の進路とかで特徴が見いだせるのではないかとということで私は追跡してい

ますが、おっしゃる様に台湾人や朝鮮人の留学生とかなり違うという事は、そのとおりだと思います。

○石田 ありがとうございます。ほかにご質問のある方がおられないようなので、今後につなげるために、最後に報告者の方に伺います。

今日はいろいろな観点から、戦前の外地と内地のつながりとか交流といったことについてご報告、ご議論をいただいたのですが、今後、戦前の高等教育史の見直しを進める上で、こういった視点や方法が大切と思われませんか。展望でも構いませんのでご意見をいただきたいと思っています。

○永島 フロアからも、各学校で作成されていた学校文書はどうなっているのかといったご質問もありましたが、台湾は比較的現地に残っておりますし、韓国の場合、京城帝大の学籍簿などはソウル大学が継承しております。北朝鮮はよく分かりません。また、外務省の外地整理室に日本人関係のものは運び込まれたりしていますので、取りあえず私の関心としては、そのようなデータの悉皆的な裏付けを取った上で、さらに議論を展開していきたいという展望を持っています。

○木村 先ほどのお答えとも関連するのですが、『大衆人事録』はほかの出身地域の人も出ていますので、そういうものをさらに見ながら在朝日本人の内地留学の本質を知りたいと思いますし、また在朝日本人の手記は千冊近く出ていと言われており、そこで留学経験のある人がどれぐらいいたか分かりませんが、留学経験がどのように描かれているかを調べたいと思います。

それからもう一つ、非常に関心があるのは、内地の日本人が外地か

ら来た日本人に対してどういう意見を持っていたかということ、あるいは地域社会の人たちがどう位置づけたかといったことを調べてみたいと思っています。ただ、もう聴き取りは不可能なので、もう少し早くやっていたらよかったと思っております。

○福岡 自己紹介で述べたように、私は旧制福岡高商（福岡高等商業学校）というかなり遅くできた地方の（専門学校を前身にもつ）私立大学に勤めています。（旧制福岡高商は）旧制高校や帝大が強調されるような研究と比べて、やはり迫力に欠ける素材です。しかし、そういう名門校ではない、いわば普通の学校を含み込めるような枠組みがどうしたらできるのかということを考えながら研究してきました。

その際に、開校して間もない旧制福岡高商すら他地域から瞬く間に人が集まるといえるのはどういう仕組みで成り立っているのか、そこから始めたのが今日のお話でした。ですから、外とのつながり方も実に多様な回路があるし、外地にしる外国にしる状況が変化するのだということが重要で、今日お話ししたとおり、じっとしていてもそこに学校ができるわけではない。それは間違いなく戦時期の人口移動、そこに人が根付いて学校が生まれていくという、やはり日本全体の動きが関わっているわけで、そういう外の変化が内部とどうつながるのか。そのような観点にたつことで、いわゆる名門校ではない一般的な学校でも含み込める枠組みができるのではないかと考えています。

○石田 ありがとうございます。だいぶ時間が過ぎてしまいましたが、これで一通り予定していた内容が終わりましたので研究会を終了させていただきます。長時間どうもありがとうございました。

（終了）